

海外農業開発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS

1984 11

- 中国の農業研究プロジェクトに世銀融資
- 最近の世界油脂事情

社団法人 海外農業開発協会

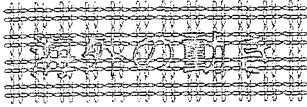


次

1984-11

海外の動き

アジア開発銀行 フィジーの農業開発事業に資金・技術援助	1
中国の農業研究プロジェクトに世銀融資	2
最近の世界油脂事情 ー伸びる油脂・低迷する油粕ー	4



アジア開発銀行

フィジーの農業開発事業に資金・技術援助

アジア開発銀行（ADB）は11月6日、フィジーにおける米の増産を主な目的とする農業開発プロジェクトに対し、320万ドルの融資と無償技術援助を行なうことを決定した。

近着のADB資料によると、同プロジェクトは主島ビテ・レブ島中央区において行なうもので、①既耕地860ヘクタールに対する灌漑・排水施設の建設、②3,395ヘクタールの開墾・造成、③政府出資の精米所（Rewa Rice Ltd., 在Nausori）の乾燥・貯蔵設備の改善、④稲作技術普及プログラムの拡大、⑤車両、視聴覚機器等の供与、⑥タチ島と主島を結ぶ橋梁の建設——などを内容とする。

受益農家は、自作農1,200戸（1戸当りの平均所有面積4.15ヘクタール）およびマタカリと呼ばれる共同で土地を所有・耕作する大家族制農民グループ44（同30ヘクタール）。

同プロジェクトの総経費は710万ドル、うち外貨コストが420万ドル、ローカルコストが290万ドル。ADBの融資は通常資金からの貸し付けで、償還期間30年（うち据置期間5年）、年利10.25%。また、技術援助は、灌漑の専門家を派遣、維持・管理マニュアルを作成するほか、稲作、営農、普及等の分野に関し現地スタッフの海外研修も行なう。

同プロジェクトの実施により、年間、粳米1万6,400トン、タロイモやキャッサバ等4,900トン、トウモロコシ1,500トン、野菜類1,400トンの増産が見込まれ、特に米については、現在同国は総需要約4万トンの半分以上を輸入に頼っているが、1992年までに年間1万1,100トンの輸入を削減、これにより毎年約270万ドルの外貨節約が可能になるといふ。一方、

年間所得も、自作農は現在の1戸当り1,960ドルから8,500ドルへ、マタカリ・グループは同1個当り1,900ドルから2万5,000ドルへ増加するものと期待されている。このほか、タチ島との間にかかる橋により、プロジェクト地域では周年通行可能な道路が確保され、資機材や収穫物の運搬が大幅に改善されるもよう。

実施機関は一次産業省で、プロジェクトの完了は1989年12月の予定。

なお、同国における米の増産計画に対しては、すでに1970年代からFAO/UNDPの援助プログラムに、主としてオーストラリアが専門家の派遣、資機材の供与等の協力を行なってきたが、さらに、近年では、1982年から中国がスバ市近郊の水田造成・管理に関する技術援助に乗り出しており、また、日本も1983年から稲作分野で青年海外協力隊員1名を派遣している。

中国の農業研究プロジェクトに世銀融資

中国政府は農業生産の増大と生産性の向上を図る計画の一環として、このほど国際開発協会（IDA、通称：第二世銀）の融資を得て総額6,900万ドルの農業研究拡充プロジェクトを実施することになった。

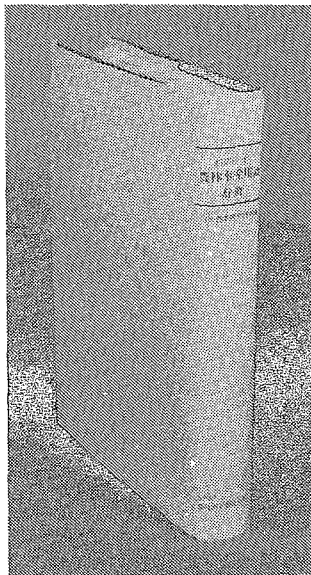
農業研究の強化は、農業部門が国内総生産の約35%を占め、2億9,000万戸を抱えるという同国においてはきわめて重要な役割をもつが、文化大革命（1966～69年）中の研究活動停止等の影響もあって、多くの試験研究機関は今日でも近代的設備の導入や専門技術者・研究者の育成が遅れているとされる。本プロジェクトはこうした状況を改善するため、実験器具や施設、農具、図書施設・書籍、コンピューター等を購入するとともに、試験研究所や普及所のスタッフを国内・外において研修させる計画。また、海外からコンサルタントを導入し、現行の研究計画の見直しや普及プログラムの作成なども行なう。

総経費のうち約64%にあたる4,400万ドルは中国政府の自己資金であるが、IDAが研究室、事務所、試験圃場施設、スタッフの宿舍等の建設・修復費用にあてるため残り2,500万ドル(2,430万SDR)を融資する。償還期間は50年(うち据置期間10年)、無利子であるが年間0.5-0.75%の手数料を賦課。

同プロジェクトは1989年に完了の予定で、これにより農業部門における増産目標の達成および農家所得や栄養水準の向上に大きな貢献がなされるものと、関係者は期待している。

なお、同国の農業研究・教育プロジェクトに対する世銀の融資は、1982年11月のIDA 6,780万SDR(本誌1982年12月号参照)、本年6月の世銀4,530万ドル、IDA 2,200万SDRに続き今回が3件めの承認。

和英 農林水産用語辞典
英和



- ☆ A5版 602頁
- ☆ 海外農業開発財団編
- ☆ 定価 10,000円
- ☆ 販売元(社) 海外農業開発協会
- TEL 03(478) 3508(代)

最近の世界油脂事情

—伸びる油脂 低迷する油粕—

農林水産省食品流通局食品油脂課

西野 豊秀

近年における世界の油脂需給は、先進国の景気後退で需要が低迷している油粕とは対照的に、比較的逼迫した状況にある。これは、インド、メキシコ等の発展途上国を中心に油脂消費が着実に伸びてきているためで、現在これらの途上国では、油糧種子の大幅な増産が求められている。そこで、こうした世界の油脂事情とその背景等について、農林水産省食品油脂課の西野豊秀氏にご解説いただいた。

概 況

わが国の製油業界は4月頃から食用油の安定供給に苦慮していた。第1に、国内の大豆油かす在庫が極めて大きく大豆搾油が思うようにならなかったこと、第2に、大豆油やなたね油の国内価格が国際価格をかなり下回り製品輸入が困難になったこと、第3に、83年産カナダなたねの買付けがほぼ不可能になったこと、第4に、大豆・なたねの国際相場が暴騰したこと、以上4つが製油業界の足枷になった。特に、第4については、製油用大豆は船積みから日本到着まで最低1カ月、ベイス買いから製品販売までをみると3カ月以上もかかることになり、その間の相場変動のリスクの大部分は製油企業個々が負う。本年のような状況下では、原料担当者は清水の舞台から飛び下りるような覚悟でブラISING等を行うことになる。このようにリスクを負わなければならない原因の1つは国内にヘッジ機能がないからである。全然ないわけでない。大豆油かすやなたね油かすのうち飼料用については殆どが配合飼料メーカーに3カ月程度の先物で販売され、大豆油やなた

ね油についてもローリー物（大口の油脂加工業者向けで可食油の約3割を占める）は先物取引される。しかし、可食油の約4割を占める業務用（16.5kg入り斗缶）はコストがどうあろうと時々市況まかせの面が強く、製油企業が常にリスクを負うようになる。また、油の余るメーカーや不足するメーカーがあるが、競争の厳しい製油業界ではその取引はかならずしもスムーズに行えない。この原因の1つは国内に取引所がないためであろう。リスクヘッジの問題は当然ながら、大豆油かすや大豆油のユーザーにもある。しかしながら、当業界・関係業界ともに大豆3品の上場には数多くの異論があり、上場するには多くの環境整備が求められよう。

83/84年度の世界の油糧種子や油脂の需給は端境期にかけ厳しい展開をみせた。一方、大豆油かすは予想以上に需要が伸びず、在庫の山が築かれ、ブラジル大豆油かすとロッテルダムとの価格が同一という状況になり、輸出国より輸入国の価格が安いということになった。もっとも、日本の大豆油の価格は慢性的に国際価格より安いという状況がつい

最近まであったが、——とまれ、旧穀の需給の厳しさは、新穀等の圧力が強まった5月後半になると予想通り価格面から弱まってきた。今や、世界の油糧関係者の関心は、84/85年度の油糧種子生産がどの程度で確定するのか、特に収穫遅れによる米国産大豆の品質は、また消費は伸びるのか停滞するのか、ソ連の穀物輸入規模は、米国の景気やドル・金利の行方はどうか、累積債務の問題、米国・EC間の農産物貿易紛争、中東情勢等々に向けられているであろう。

油脂及び油粕の消費事情

(1) 油脂

83/84年度に危惧された「油脂のショージ」という最悪の事態は価格の力で何とか切り抜けられたと言ってよい。しかし、価格が急騰した中で1万4000トン増とはいえ、油脂消費が前年度を上回る4,295万9000トンになる意味は大きい。消費増を支えたのは予想通りインド、メキシコ等の発展途上国で、今後もこれら諸国の動向が国際需給や価格に強い影響を与えよう。表1をみると上位30国のうち、83/84年度の消費量が前年を上回るのは12カ国で、最も高い伸びを示すのはアルジェリアで、メキシコ、インドが続いている。量的にはインドの増加が際立ち、これにメキシコ、インドネシアと続く。上位30カ国を先進国と途上国にわけてそのシェアをみると、前者は77/78年度が56.3%(1,563万1,000トン)82/83年度は50.1%(1,798万4,000トン)、83/84年度49.3%(1,769万7,000トン)と確実に落ちてきている。なお、この間、世界の油脂消費量に占める30カ国のシェアはほとんど変わっていないので、途上国のシェアが着実に増大してきたといえよう。

インドの83/84年度の油脂消費は、前年比54万3,000トン増の442万3,000トンで、この種の油脂消費では中国を抜き世界第2位

になる。インドの77/78年度から82/83年度までの油脂消費の年平均伸び率は1.6%増であり、価格高騰下の本年度に14%も伸びるのは我々からみれば異常としかいいようがない。この伸びの背景には、①外貨事情の好転(金を除く外貨準備高:81年末47億ドル82年末43億ドル、83年末49億ドル)、②穀物の増産により小麦等の輸入が激減し外貨を油脂輸入に振り向けることができた(穀物生産82/83年度11億1,900万トン、83/84年度13億6,600万トン)、③国民(特に都市生活者)の油脂の値上りに対する不満の抑制、④食用油への動物脂混入問題対策、⑤1985年1月に任期切れとなる国民議会選挙対策、⑥所得の向上等であろう。インドの植物油消費は1人当たり消費水準(83/84年度5.92kg)、人口(84年7億4,700万)人口増加率(78年から84年まで2.5%増、84年から2,025年まで1.1%増)、宗教等からみて今後も伸びるとみて間違いなからう。ただし、84/85年度の伸びは国内の油糧種子生産動向にもよるが、前年度のように高いものでなく低いものと推測される。

メキシコの83/84年度の油脂消費は14.5%増の78万3,000トンと見込まれ、量的な面では世界の15位にすぎぬが、消費の年平均伸び率は10%と高く、しかも需要の伸びのかなりを米国・カナダ等の国際市場において原料、又は製品の形で買い付けるためインド・パキスタン(これら諸国は搾油能力等の不足のため製品輸入中心)以上に要注意の国である。メキシコはブラジル、アルゼンチンと並ぶ大債務国であるが、前2者と異なり石油輸出国であること、大統領は6年交代で、任期末期にはドルが国外へ流出し経済が大混乱するものの、政権は制度的革命党が半世紀以上にわたり掌握しており安定していること、農業国でありながら人口の都市集中が進み農業生産が停滞していること、人口増加率が2.8%(78年から84年:2,025年までは

表1 植物油及び魚油の国別消費量(上位30カ国)

(単位:千トン)

国名	年度	1977/78	シェア(%)	78/79	79/80	80/81	81/82	82/83	83/84 (予測)	シェア (%)	年平均 伸び率
※米 国		4951	148	5,146	5,141	5,177	5,418	5,564	5,468	12.7	16.7
イ ン ド		3,583	10.7	3,435	3,661	3,570	3,837	3,880	4,423	10.3	3.57
中 国		1,941	5.8	2,287	2,664	3,008	3,878	4,465	4,248	9.9	13.94
※ソ 連		2,999	9.0	2,997	3,039	3,028	3,407	3,342	3,302	7.7	16.2
ブ ラ ジ ル		1,256	3.8	1,476	1,666	1,603	1,645	1,078	1,675	3.9	4.91
※日 本		1,338	4.0	1,422	1,411	1,559	1,621	1,657	1,653	3.8	3.67
※西 独		1,188	3.6	1,344	1,389	1,439	1,443	1,485	1,443	3.4	3.29
インドネシア		888	2.7	951	862	1,380	1,325	1,318	1,389	3.2	7.74
※イ タ リ ア		1,137	3.4	1,190	1,274	1,214	1,222	1,203	1,189	2.7	0.75
※英 国		956	2.9	1,019	989	981	1,120	1,060	1,014	2.4	0.99
ナイジェリア		730	2.2	751	837	957	1,110	1,116	994	2.3	5.28
パキスタン		527	1.6	638	607	707	777	894	863	2.0	8.57
※フ ラ ン ス		724	2.2	780	820	777	864	877	809	1.9	1.87
※ス ペ イ ン		685	2.1	791	721	671	761	759	790	1.8	2.41
メ キ シ コ		442	1.3	455	558	666	670	684	783	1.8	10.00
ト ル コ		445	1.3	466	521	580	581	641	653	1.5	6.60
マレーシア		207	0.6	278	422	469	498	609	630	1.4	20.38
※オ ラ ン ダ		570	1.7	664	672	627	666	634	619	1.4	1.38
※カ ナ ダ		422	1.3	415	447	462	457	493	488	1.1	2.45
エジプト		394	1.2	353	430	462	408	454	488	1.1	3.63
アルゼンチン		339	1.0	324	351	341	386	378	389	0.9	2.32
※ポーランド		227	0.7	293	255	305	273	319	330	0.8	6.43
※ベ ル ギ		185	0.6	227	273	250	310	317	321	0.7	9.62
イ ラ ン		422	1.3	316	365	317	373	369	305	0.7	5.27
ルーマニア		237	0.7	271	316	337	334	323	305	0.7	4.29
フィリピン		133	0.4	210	210	229	322	292	272	0.6	12.66
※ギ リ シ ャ		249	0.7	253	242	264	264	274	271	0.6	1.42
アルジェリア		179	0.5	210	248	224	189	213	259	0.6	6.35
コロンビア		192	0.6	236	282	265	315	292	257	0.6	4.98
南アフリカ		237	0.7	229	297	282	229	246	249	0.6	0.83
小 計		27,783	83.4	29,427	30,970	32,151	34,703	35,866	35,879	83.5	4.35
そ の 他		5,543	16.6	6,155	6,204	6,531	6,972	7,079	7,080	16.5	4.16
世 界 計		33,326	100.0	35,582	37,174	38,682	41,675	42,945	42,959	100.0	4.32

(出所)米国税務省

- (注) 1. 植物油には大豆油, パーム油, ひまわり油, なたね油, 綿実油, 落花生油, やし油, オリーブ油, パーム核油を含む。
2. ※印は先進国である。

1.7% 増) 増と高いこと、米国の隣国であるため米国はメキシコの安定に種々配慮せざるをえないこと等から、今後もメキシコの油脂消費は増加を続けるであろう。

中国の油脂消費は、生産責任制の導入等により油糧種子生産が増加したことや自由市場の利用等から急速に伸び、ソ連を抜き世界第3位になるとみられる。ラード等の動物脂を含めた中国の油脂消費は424万8,000トンを160万トン程度上回るとみられるが、副次的に生産される動物脂の供給には限界があることから、需要増のかなりは植物油に負うことになろう。因みに、中国の77/78年度から83/84年度までのラード需要の年平均伸び率は9.3%増で、植物油の13.9%増を大幅に下回る。中国は現下の農業生産が伸びる限りやし油のような油脂を除いては、国際市場から余り手当しなないとみてよいだろう。

マレーシア、インドネシア、フィリピンの3国は油脂の輸出国で、かつ油脂消費の伸びが高く、消費の伸び率が輸出のそれを上回るという共通点がある。特に、インドネシアは油脂消費の中心がやし油であるが、国内消費の増大と反比例するように輸出が困難になり、一時やし油輸入国になった。このため、同国政府はパーム油の消費キャンペーンをし効果を上げたが、今度はパーム油の輸出力が落ち、季節的、又は不作時には輸出ができないという状況にある。これは、インドネシアだけでなく、フィリピンやブラジル等の中所得国に共通した問題である。

先進国の油脂消費は、既に栄養水準が高くダイエットの必要が叫ばれるほか、所得弾性値も価格弾性値も低くなっているため、伸びは余り見込めず、1%台の低いものになろう。これとは逆に発展途上国の需要は、累積債務、外貨準備、経済発展の歩度、富の分配の不公平等の問題はあがあるが、人口増の圧力、所得増、農業発展(農業生産の増加する国の油脂消費は増える傾向にある)等により、5%前後の

高い伸びが期待できるのでなかろうか。

途上国中心の油脂消費の増加は、表2の通りパーム油やなたねのような高油分の品目の伸び率を高くし、粕製造時の副産物である大豆油の伸びを低くしている。これらの傾向は油糧種子生産に大きな影響を与えている。

表2 世界の主要植物油及び魚油消費の年平均伸び率

(単位: %)

品目	1974/75 1983/84	1979/80 1983/84	1982/83 1983/84
パーム油	892	763	-042
なたね油	868	-1122	-330
パーム核油	676	794	210
大豆油	631	157	-140
ひまわり油	450	455	300
オリーブ油	274	031	020
やし油	137	-013	-120
魚油	110	009	000
落花生油	101	218	420
綿実油	057	212	350

世界の主要植物油及び魚油輸出の年平均伸び率

(単位: %)

品目	1974/75 1983/84	1979/80 1983/84	1982/83 1983/84
なたね油	1144	943	1042
ひまわり油	1116	946	-120
大豆油	1083	058	-275
パーム核油	943	843	759
パーム油	887	179	186
オリーブ油	716	-177	-965
魚油	266	-160	-1584
やし油	257	-166	-1365
綿実油	-179	-1143	-3436
落花生油	-397	-1418	-3178
合計	6.90	1.27	-3.73

(出所) USDA foreign agriculture circular
(oilseeds & products) June 1984.

表3 高蛋白粕需要国上位11カ国と特掲国

(単位:千トン)

国名	年度	74/75	75/76	76/77	77/78	78/79	79/80	80/81	81/82	82/83	83/84 (見込)	年平均伸び率 77/78-83/84(%)
米 国		13603	16142	14750	17160	18413	19974	18368	18731	19980	17696	05
中 国		5677	5711	4986	5133	5797	6409	7106	8915	9745	9758	113
ソ 連		5392	5650	5845	5433	5483	5724	6187	6994	8213	7592	57
日 本		3516	3653	4121	4347	4496	4567	4443	4590	4907	4970	23
西 独		4529	4914	4748	5462	5861	6242	5433	5597	5412	4954	16
イ ン ド		3112	2709	2575	3329	3254	3195	3239	4161	3813	4543	53
フ ラ ン ス		2485	2941	2935	3598	4084	4229	4224	4522	4580	4513	38
イ タ リ ア		1560	1982	1904	2198	2863	2539	2275	2606	2581	2743	38
オ ラ ン ダ		1644	1988	1890	2118	2196	2573	2591	2866	2731	2655	38
ス ペ イ ン		1875	2314	2108	2278	2432	2805	2607	2738	2744	2621	24
ブ ラ ジ ル		1315	1230	1742	1927	2512	3207	2833	2561	2727	2518	46
メ キ シ コ		957	897	1139	1198	1343	1674	1954	2050	1673	1942	84
台 湾		629	691	625	746	738	817	838	997	1032	1020	54
韓 国		82	156	184	249	458	368	502	625	872	855	216
アルゼンチン		487	315	252	249	343	447	329	482	396	399	82
東 欧		4806	5363	5602	5968	6777	7035	7103	6260	6095	6085	03
世界計(その他を含む)		63024	68869	68227	75346	80924	88239	85819	93126	94121	91750	33
うちEC(7カ国)		14251	16473	16160	18886	21032	21588	20505	22396	21838	21251	20

(出所) 米 国農務省

表4 世界の高蛋白粕生産の推移

(単位:千トン)

品名	年度	73/74	74/75	75/76	76/77	77/78	78/79	79/80	80/81	81/82	82/83	(見込) 83/84	年平均 伸び率 77/78- 83/84	蛋白 値
大豆 粕		38393	35887	42515	42414	48835	52393	59486	56786	59851	61392	57984	29	10000
綿実 粕		7744	7578	6583	6746	7412	7225	7531	7854	8346	8002	8016	13	08103
落花生粕		4440	4965	5381	4753	4443	4891	4656	4309	5474	4795	5106	23	11240
ひまわり粕		4361	3774	3516	3716	4624	4848	5354	5097	5436	6188	6081	47	09442
なたな粕		2925	2908	3099	3210	3123	3729	3707	4440	5205	6063	5949	113	07115
やし 粕		499	668	791	719	716	639	649	704	697	616	612	-26	04515
パーム粕		175	186	201	201	195	210	242	248	310	323	351	103	03557
魚 粉		6542	6396	6988	6391	6961	7072	6920	7002	7432	6784	6802	-03	14452
計		65078	62361	69074	68150	76309	81007	88546	86441	92750	94193	90901	30	

(出所) USDA foreign agriculture circular (oilseeds & products) May 1984.

(注) 大豆粕を1として、それぞれの蛋白値を計算している。

(2) 高蛋白粕 (表3～4)

83/84年度の世の高蛋白粕需要は、油脂と異なりプライスレッシング作用により、前年比2.5%減の9,175万トンになるとみられている。高蛋白粕消費の減少が大豆搾油を抑え、油脂需給をタイトなものにし、油脂価格を異常に上昇させたといえよう。高蛋白粕消費減少の要因には、①大豆を始めとする油糧種子の減産、②本年度第1四半期(10月～12月)の大豆油粕等の高蛋白粕の高騰、③弱含みの畜肉製品価格に対し飼料価格が高騰したことによる飼養効率の悪化、④ECにおいてコーン等の穀物に対し大豆油粕が割高になったこと(大豆油粕/コーン:83年6月0.95, 83年11月1.31)、⑤ドル高、⑥ソ連の大豆油粕需要の減少、⑦コーングルテンフィード、脱脂粉乳、小麦等の使用増加、高蛋白粕需要減等がある。国別では、途上国のインド、メキシコの伸びが油脂消費同様際立っている。先進国ではイタリア、日本が増加するとされているが、日本の状況を見るとUSDAの見通しをかなり下回り、減少するのは確実である。米国やEC諸国の減少が目立つが、これは先に述べたような要因により、米国やECの牛や子取り用めす豚等が減少しているためである。

77/78年度から83/84年度までみると、韓国、中国の年平均伸び率は各々21.6%、11.3%と高く、これにメキシコ、ソ連が続いている。概して発展途上国の伸びは第2次石油危機以降顕著であり、逆に先進国はそれを境に伸び悩んでいる。表1と表3を比べると、消費の伸び率は油脂が勝っており、含油分の高い油糧種子が求められる所以がわかる。また、上位11カ国に限ってみると、表1の途上国のシェアは77/78年度の40.1%から、83/84年度の47.5%に増え、表3では、同期間に19.6%から26.1%に6.5%シェアを伸ばすが、シェア自体先進国の3分の1にも満たない。同様に1人当たり消費量(83/84

年度)は表1では先進国が17.5kg、途上国は3分の1の5.8kg、表3では先進国55.7kg、途上国8.7kgで前者が後者の6.4倍になっている。以上のことから、高蛋白粕消費において、日米欧の消費力は弱まり、伸び率は2～3%台とみられるが、途上国の消費の伸び率は大きいものの量的にはまだ少ないので、市場に与える影響は先進国の方が強いとみられる。最近では、高蛋白粕の場合、ソ連の需要如何んが市場の動向を大きく左右するのでなかろうか。同国の穀物生産や畜肉生産状況等に注意を払っておく必要がある。

油脂及び油粕の貿易事情

(1) 油脂

83/84年度の輸出量は油脂価格の高騰やドル高、さらには輸出国の輸出余力の低下等が響き、前年比3.8%減の1,324万8,000トンと見込まれる。輸出減少の著しい油は綿実油、落花生油、魚油、やし油で、これら油は77/78年度以降のレンジでみても減少しており、将来的にも増加は期待できない。綿実油や落花生油は品質の安定性や風味の良さから欧米人に特に好まれるが、年々市場から姿を消しており、オイルワールド誌も本年5月3日から9月27日までの綿実油価格を殆んど、掲載できないでいた。83/84年度に増加する油脂はなたね油、パーム核油、パーム油である。なたね油は途上国の油脂需要が増加するまでは市場性に乏しく、なたねの生産・輸出国のフランスとカナダが北アフリカやインドの市場を巡り覇を争うという状態であり、カナダの製油産業が成長できない原因にもなっていた。年平均伸び率はパーム核油、ひまわり油、パーム油、なたね油(いずれも油分が高い)の順に高く油脂需要の伸びを反映したものといえよう。

主要な油脂輸出国の状況をみると表5の通り、マレーシアの輸出量は世界1で、同国のシェアは77/78年度の17.2%から83/84

表5 主要な植物油及び魚油の輸出国の輸出量の推移

(単位:千トン)

項目	年度	77/78	シェア (%)	78/79	79/80	80/81	81/82	82/83	(見込) 83/84	シェア (%)	年平均 伸び率
マレーシア	パーム油	1,514	15.6	1,901	2,260	2,469	2,829	2,894	2,960	22.3	
	パーム核油	130	1.3	198	215	242	333	362	384	2.9	
	やし油	22	0.2	66	65	64	60	69	65	-0.5	
	大豆油	0	0.0	0	5	22	31	34	36	0.3	
	計(落花生油を含む)	1,673	17.2	2,167	2,547	2,799	3,255	3,361	3,447	26.0	12.8
米	大豆油	933	9.6	1,059	1,220	740	942	918	748	5.6	
	ひまわり油	34	0.3	41	86	301	103	229	280	2.1	
	綿実油	344	3.5	300	330	322	384	247	125	0.9	
	魚油	101	1.0	90	129	108	92	183	120	0.9	
	落花生油	57	0.6	18	7	22	18	2	4	0.0	
ブラジル	計(やし油を含む)	1,474	15.2	1,513	1,791	1,504	1,549	1,587	1,287	9.7	-2.2
	大豆油	522	5.4	459	809	1,212	873	947	900	6.8	
	綿実油	14	0.1	35	52	93	92	80	65	0.5	
	落花生油	61	0.6	83	122	46	76	53	43	0.3	
	パーム油	0	0.0	0	1	4	6	4	7	0.0	
アルゼンチン	計(その他を含む)	597	6.1	578	987	1,358	1,052	1,084	1,015	7.7	9.2
	ひまわり油	161	1.7	239	300	207	435	621	570	4.3	
	大豆油	59	0.6	102	88	84	220	300	525	4.0	
	落花生油	63	0.6	125	82	35	38	31	18	0.1	
	計(その他を含む)	300	3.1	504	500	343	718	976	1,137	8.6	24.9
フィリピン	やし油	990	10.2	795	914	1,047	949	1,020	870	6.6	
	計(パーム油を含む)	990	10.2	795	914	1,047	949	1,023	874	6.6	-2.1
インドネシア	パーム油	412	4.2	351	503	196	240	280	300	2.3	
	やし油	0	0.0	21	41	4	0	7	0	0.0	
	計(パーム核油を含む)	421	4.3	372	544	205	243	287	300	2.3	-5.5
ハンガリー	ひまわり油	38	0.4	45	85	117	127	145	177	1.3	
	計(その他を含む)	49	0.5	47	90	125	137	161	196	1.5	26.0
カナダ	なたね油	74	0.8	111	152	198	163	112	160	1.2	
	計(その他を含む)	84	0.9	124	170	226	186	141	171	1.3	12.6
合計	パーム油	2,447	25.2	2,935	3,723	3,416	3,968	3,924	3,997	30.2	8.5
	大豆油	2,653	27.3	2,919	3,529	3,426	3,628	3,714	3,612	27.3	5.3
	ひまわり油	725	7.5	838	1,088	1,175	1,177	1,581	1,562	11.8	13.6
	やし油	1,265	13.0	1,092	1,204	1,341	1,246	1,304	1,126	8.5	-1.9
	なたね油	570	5.9	598	643	824	822	835	922	7.0	8.3
	魚油	736	7.6	787	782	818	788	871	733	5.5	-0.1
	パーム核油	228	2.3	331	369	383	449	474	510	3.8	14.4
	オリーブ油	243	2.5	293	283	267	219	311	281	2.1	2.5
	綿実油	395	4.0	378	416	441	532	390	256	1.9	-7.0
	落花生油	458	4.7	463	459	265	374	365	249	1.9	-9.7
	計	9,720	100.0	10,634	12,496	12,356	13,203	13,769	13,248	100.0	5.3

(出所) USDA

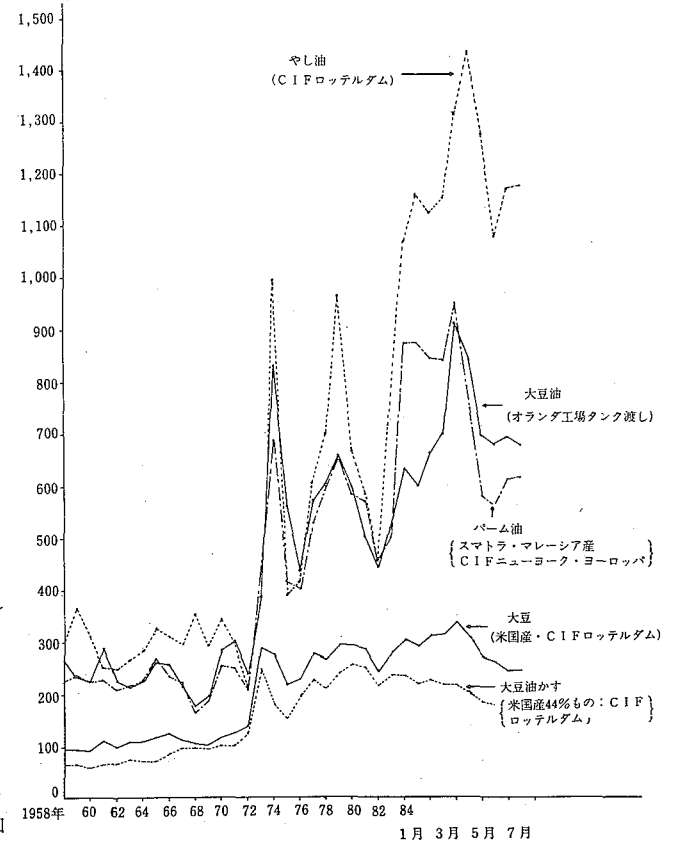
(注) シェアは合計に対するものである。

年度の26%へ急速に拡大している。量的にはパーム油が多いが、近年、大豆油やパーム核油の輸出が目立つ。大豆油はマレーシアの大豆油粕需要如何によって生産量が決まるので、ここしばらくは3万トン台とみて良いが、国内に大豆油需要が殆どないことも念頭に入れる必要がある。米国の油脂輸出量はひまわり油を除いて漸減傾向にある。減少要因には、①ドル高、②2度の熱波による価格高騰、③ブラジル、アルゼンチン等の競争国の台頭、④インド、イラン等の反米政策、⑤80年の対ソ穀物禁輸の後遺症等であろう。とはいえ、「いざ」という時最も頼りになるのは米国であることを忘れてはいけない。アルゼンチンは84/84年度にブラジルを抜き世界第3位の輸出国になるが、ひまわり油と大豆油を持っているためブラジルより安定した油脂輸出国になる。ブラジルは国内消費の増加から輸出余力は落ちてきているが、

セラード地帯やカラジャス地域等未開発地域を抱えていることから潜在的な供給力はかなり大きいといえよう。今後ともこの4国が世界の油脂輸出の中心になっていこう。因みに、4カ国の油脂輸出に占めるシェアは77/78年度の41.6%から83/84年度に52%へ拡大するとされている。

83/84年度の世界の油脂輸入は前年比2.0%増の1,269万8,000トンと見込まれている。油脂輸入量(純輸入)の最も大きい国は表6のとおりインドで前年比9.7%増の133万トン(シェア10.5%)、2位は英国で同4.6%減の69万2,000トン、3位はパキスタンで同2.3%増の66万トン、ソ連は4位で同5.3%減の57万2,000トンと見込まれている。

USドル/トン (図) 大豆3品及び主要油脂の価格



(出所) Oil World

ここでも途上国が伸び、先進国が減少するというパターンが出ている。

世界の油脂輸入動向に影響を与えるインド、パキスタン、ソ連の輸入についてみよう。インドにおいては、大豆油とパーム油が2大輸入品目であるが、本年度はこれになたね油が加わった。パーム油の輸入が減少し、大豆油、なたね油が急増したのは価格差によるものである。表7のとおり輸入先国はパーム油の関係でマレーシアのシェアが4割強で最も高い。大豆油は80年を境に米国のシェアが激減し、代わってブラジルが4割弱のシェアを保持している。米国は80年以前は20%から30%のシェアを維持していたが、83年には4%台に落ちており、シカゴ市場が寂しくなる

表6 インド、パキスタン、ソ連の植物油及び魚油の純輸入量

(単位:千トン)

区分	年度	77/78	78/79	79/80	80/81	81/82	82/83	83/84(見込)
インド	大豆油	511	553	643	595	419	500	650
	パーム油	484	394	555	453	435	620	400
	綿実油	0	0	0	28	0	0	0
	なたね油	273	138	126	113	52	74	200
	ひまわり油	0	0	0	0	0	0	70
	落花生油	5	-3	0	0	0	0	0
	パーム核油	0	0	1	20	35	9	0
	やし油	10	5	0	71	14	9	10
	計	1,283	1,087	1,325	1,280	955	1,212	1,330
パキスタン	大豆油	206	277	217	219	304	310	350
	パーム油	132	203	233	237	220	335	310
	綿実油	10	0	0	0	0	0	0
	やし油	0	10	13	15	3	0	0
	計	348	490	463	471	527	645	660
ソ連	大豆油	3	20	72	112	192	230	200
	パーム油	41	105	102	181	339	293	310
	綿実油	-1	0	0	2	0	0	0
	なたね油	4	0	0	0	0	0	0
	ひまわり油	-137	-59	-73	120	126	-10	-10
	パーム核油	0	1	12	13	13	7	10
	オリーブ油	9	7	12	15	8	14	13
	やし油	51	48	79	66	93	71	50
	魚油	-1	-1	-1	-1	-1	-1	-1
	計	-31	121	203	508	770	604	572

(出所) USDA foreign agricultural circular (oilseeds & products) June 1984

表7 インド、パキスタン、ソ連、ナイジェリアの植物油及び魚油輸入に占める国別シェア

(単位:%)

区分	年	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983
インド	米	21.0	20.8	20.6	32.2	4.8	7.1	4.5
	ブラジル	16.5	14.2	21.9	12.6	39.9	36.4	35.6
	マレーシア	18.4	25.7	25.7	30.0	32.0	42.7	46.0
	その他の国	44.1	39.3	31.8	25.2	23.3	13.8	13.9
パキスタン	米	42.2	30.5	33.5	31.7	26.7	49.3	36.7
	ブラジル	—	24.4	18.9	13.1	10.2	6.0	5.7
	マレーシア	28.0	27.0	13.6	25.2	47.1	43.6	53.5
	アルゼンチン	—	—	2.2	1.9	—	—	—
ソ連	スベイ	—	6.3	1.8	—	5.9	1.0	4.1
	その他の国	29.8	11.8	30.0	28.1	10.1	—	—
ナイジェリア	米	—	—	10.6	—	—	—	—
	ブラジル	—	—	8.5	10.4	10.2	8.7	13.6
	マレーシア	36.5	21.8	23.4	18.2	22.3	30.2	35.8
	アルゼンチン	—	—	—	18.9	27.3	15.1	23.1
西独	スベイ	—	—	—	1.0	4.6	10.3	7.8
	その他の国	63.5	78.2	57.5	51.5	35.6	35.7	19.7
アソ	米	6.1	—	—	0.5	—	—	—
	ブラジル	—	2.5	—	—	4.8	3.3	2.8
	マレーシア	39.3	—	4.7	14.0	24.2	32.1	21.6
	フランス	—	—	8.4	7.8	5.5	2.1	1.0
アソ	西独	39.4	9.0	42.5	54.2	44.8	42.0	22.5
	その他の国	15.2	88.5	44.4	23.5	20.7	20.5	52.1

(出所) USDA foreign agriculture circular (oilseeds & products) June 1984

わけである。パキスタンの油脂輸入は大豆油とパーム油に集中してきており、しかも安定した伸びを示している。インドと異なりパーム油の減少が7.5%にすぎぬが、これはパーム油が加工し易いことや嗜好が高いためであろう。輸入先出国は輸入量に占めるパーム油シェア同様にマレーシアが50%台で、米国は30%台と比較的落ち着いており、ブラジルは6%前後にすぎない。このインドとパキスタンにおける米国の地位を較べると、国際政治の影響が油脂貿易に色濃く出ていると言えよう。もっともPL480によるパキスタン向け植物油輸出が多いことも忘れてはいけないが、ソ連の油脂輸入の中で最も伸びたのは大豆油、次いでパーム油となるが量的にはパーム油が最も多い。輸入先国では、米国は80年以降ゼロで、米国に代わりブラジル及びアルゼンチンのシェアが伸び本年度は両国で36.7%、マレーシアは安定的に伸び35.8%、スペインも80年以降増加し7.8%を占めている。最近、ソ連は輸入先国の多元化と同国の影響力の増大のため等からインドネシアからもパーム油の輸入をしている。こうしてみるとソ連の買付けは80年以降大きく変ったといえる。

(2) 油 粕

世界の高蛋白粕輸出を73/74年度から83/84年度まででみると、年平均伸び率は6%で、種子輸出(高蛋白粕ベース)の3.5%を大きく上回る。これは種子輸出が減少し粕輸出、特に大豆粕輸出が増加したことを示す。

83/84年度の高蛋白粕輸出2,813万1,000トンに占める大豆粕のシェアは75.9%、大豆輸出も粕換算してみると輸出量5,091万9,000トンの82.1%と圧倒的な地位を石めるこの傾向は最も競合する落花生や魚粉の生産が停滞、又は減少しているので今後も続くと思われる。

83/84年度の世界の高蛋白粕輸入量は前年比6.6%減の2,771万6,000トンと見込ま

れる。高蛋白粕輸入上位10カ国は全てヨーロッパ諸国で、そのシェアは70.8%であり、上位20カ国に広げても欧州以外はベネズエラ、カナダ、日本、イランが加わるのみであり、20カ国のシェアは85.4%になる。このように粕輸入の中心はヨーロッパであるため、この地域の景気、対ドル交換レート、農業政策等がシカゴ大豆相場に大きな影響を与えることになる。

価 格

世界の油脂価格は、図をみると1958年以降3つのピークを持っている。1つは第1次石油危機の翌年74年、2つ目は第2次石油危機前年の79年、3つ目が本年である。いずれのピークもやし油が先導者の様に上昇し、ピークを極め、「山高ければ谷深し」とばかりに落ち込んでいる。やし油のようにポリウムが小さく代替性に乏しいラウリン系油脂となれば値動きは激しくならざるを得ないだろう。

1984年10月現在、やし油を除いては、パーム油は主として増産により、大豆3品は新穀の圧力、ドル高、米国の金利上昇懸念に伴う穀物市場からの資金移動、南米の輸出圧力等から下落しているが、83年6月と比較すると、やし油69.3%、パーム油56.1%、大豆油59.8%、大豆0.8%とそれぞれ上昇しているが、大豆油粕は6.6%下落している。この下落は、大豆油粕需要の減少と南米の輸出圧力によるものであろう。

大豆油についてオイルヴェリヤー(以下「OV」)をみると、83年6月が33%弱、84年10月47%で、この1年余の間にOVが急上昇したことがわかる。過去2度のピーク時のOVは、74年51%、79年39%弱であり、現在の状況は74年に近いといえよう。ただし、当時と異なり現在は油脂需要が途上国で強く、先進国の高蛋白粕需要が弱い状況を考えると油価格は74年程急激に下がらな

表8 世界の大豆生産量及び収穫面積

国名	区分 年度	生産量 (単位:千トン)						面積 (単位:千ha)					
		78/79 82/83	80/81	81/82	82/83	83/84 (見込)	84/85 (予測)	78/79 82/83	80/81	81/82	82/83	83/84 (見込)	84/85 (予測)
米 国	9月~11月	55,011	48,922	54,136	59,611	44,525	51,765	27,310	27,443	26,775	28,102	25,816	27,596
ブラジル	3月~5月	13,557	14,978	12,835	14,582	15,400	15,700	8,370	8,485	8,202	8,136	9,439	9,250
アルゼンチン	4月~6月	3,810	3,600	4,150	4,000	6,200	6,000	1,955	1,880	1,986	2,281	2,675	2,950
パラグアイ	2月~5月	664	660	830	740	660	700	429	420	458	430	420	430
カナダ	8月~11月	673	713	607	857	722	936	299	283	279	364	364	417
ソ 連	10月~11月	533	525	491	550	500	500	849	854	864	876	886	900
メキシコ	9月~11月	550	312	712	672	620	400	314	155	378	391	451	—
中 国	8月~11月	8,266	7,940	9,328	9,030	9,760	10,000	7,611	7,226	8,024	8,415	7,567	7,700
イ ン ド	11月~1月	409	442	467	491	600	800	568	560	622	768	810	—
世界計(その他を含む)		86,489	81,102	86,594	93,657	81,900	90,200	50,412	50,027	50,370	52,422	50,435	52,636

(出所) Oil World October 12, 1984 及び USDA

いのではない。下落率の多くを大豆油粕が引き受けざるを得なくなろう。大豆にとっては弱要因となる。ロッテルダムとシカゴの違いはあるが、11月30日現在シカゴのOVは46%強と、5月の50%弱(ロッテルダム49%)からやや落ちてきている。けれど、米国の政治・経済状況、大豆製品の国際市場の情勢を考えると、大豆油はブル、大豆油粕はベアということになる。

84/85年度の油糧種子生産予測

83/84年度の世界の主要油糧種子生産は、米国農務省によれば、南米の生産はかなり増加したものの、米国の大減産が響き、前年比7%減の1億6,550万トンになったとみられる。84/85年度については、北半球の収穫はほぼ終了した。作付け時の油糧種子価格、特に油脂価格が高値であったため作付けが急増した結果、前年比約11.2%増の1億8,420万トンになると予測している。

(1) 大豆(表8)

83/84年度の世界の大豆生産は前年比12.5%減の8,190万トンと見込まれている。懸念された端境期の需給は価格の高騰や南米

大豆の豊作、さらに大豆油かす需要の減少に助けられ事無きを得た。

84/85年度の生産予測は前年比12%増の9,020万トンである。米国の大豆生産は、作付面積7%増の60万ha、単収8.8%増の1,917kgで前年比16.3%増の5,176万5,000トンと予測されている。因みに、米国の大豆需給は、供給が260万トン増えるが需要が1,600トン増にすぎないので期末在庫は増加し、緩和するとしている。このため大豆価格はブッシェル当り83/84年度の7.75ドルから6.00ドル~7.20ドルに下がるとみている。中国大豆は生産地の東北部で、生殖生長期直前の降雨に恵まれる等天候条件が良く、前年を上回る1,000万トンの生産が期待されている。ただし、一部に作付けが伸びていないとか早魃との報もある。南米大豆の生産は、ブラジルについては10月から作付が始まっているが、農業融資が前年より少なくなったため肥料や良質な大豆種子の使用等農業資材の節約が伝えられていること、シカゴ大豆価格がブッシェル当り7ドル以下になっていること、大豆の最低保証価格が市場価格を下回っていること等から、作付が前年より減少するものの単

表9 世界のなたね生産量及び収穫面積

区分 国名	収穫期	年度	生産量 (千トン)				面積 (千ha)			
			81/82	82/83	83/84 (見込)	84/85 (予測)	81/82	82/83	83/84 (見込)	84/85 (予測)
カナダ	8月~10月		1,837	2,246	2,632	3,206	1,401	1,777	2,334	2,890
E E C	7月~8月		2,003	2,666	2,495	3,384	906	1,007	1,103	1,147
西欧(EECを除く)	7月~8月		413	491	487	456	263	278	275	267
東欧	7月~8月		1,164	1,156	1,465	1,567	657	700	769	904
うちソ連	8月~9月		29	58	69	120	59	100	144	200
中国	7月~8月		4,065	5,656	4,287	3,960	3,801	4,122	3,855	3,529
インド	2月~4月		2,382	2,472	2,700	2,700	4,399	4,194	4,400	4,500
世界計(その他を含む)			12,338	15,152	14,463	15,939	12,135	12,765	13,409	14,071

(出所) Oil World October 12, 1984

表10 世界のひまわり生産量及び収穫面積

区分 国名	収穫期	年度	生産量 (千トン)					面積 (千ha)			
			78/79 ~82/83	81/82	82/83	83/84 (見込)	84/85 (予測)	78/79 82/83	82/83	83/84 (見込)	84/85 (予測)
ソ連	9月~10月		5,084	4,678	5,341	5,040	5,200	4,348	4,260	4,230	4,200
東欧	8月~9月		2,129	2,252	2,172	1,960	2,071	1,226	1,214	1,141	1,163
E E C	8月~9月		372	488	748	983	1,273	172	340	505	563
西欧(EECを除く)	8月		545	409	795	764	902	747	1,030	1,124	1,231
米国	9月~10月		2,300	2,098	2,419	1,451	1,663	1,726	2,054	1,227	1,460
アルゼンチン	3月~4月		1,744	1,980	2,400	2,200	2,500	1,653	1,902	1,975	2,150
中国	9月~11月		832	1,332	1,300	1,320	1,400	718	1,020	1,045	1,050
世界計(その他を含む)			14,712	15,120	16,812	15,496	17,012	12,409	13,787	13,435	14,261

(出所) Oil World October 12, 1984

表11 世界の綿実生産量及び収穫面積

区分 国名	収穫期	年度	生産量 (千トン)				収穫面積 (千ha)			
			81/82	82/83	83/84 (見込)	84/85 (予測)	81/82	82/83	83/84 (見込)	84/85 (予測)
ソ連	9月~10月		5,100	4,800	4,800	4,900	3,168	3,188	3,189	3,200
エジプト	8月~10月		810	760	660	670	495	448	417	417
米国	8月~1月		5,803	4,304	2,790	4,805	5,601	3,937	2,982	4,194
ブラジル	8月~7月		1,300	1,235	1,040	1,200	2,080	2,120	2,000	2,020
中国	8月~3月		5,490	6,655	8,580	8,800	5,185	5,829	6,105	6,100
インド	9月~4月		2,713	2,660	2,550	2,600	8,057	8,074	8,000	8,000
パキスタン	9月~1月		1,497	1,648	990	1,400	2,167	2,263	2,277	2,270
世界計(その他を含む)			27,737	26,561	26,456	30,015	33,064	32,102	31,858	33,609

(出所) Oil World October 12, 1984

収が増え、前年比 1.9 % 増の 1,570 万トンになると予測されている。アルゼンチンの大豆生産は、同国政府が小麦やソルガム作に対し政府融資を削減したため大豆作付が前年より増加するものの、単収が大豊作になった前年より落ちるとみられるので前年比 3.2 % 減の 600 万トンの生産量になると推測されている。

(2) なたね (表 9)

83/84 年度の生産は中国及び E C の減産により前年比 4.5 % 減の 46 万 3,000 トンになった。84/85 年度は油脂需要の増加となたね需給の逼迫、さらには良天に恵まれていることを反映し、オイルワールド誌では前年比 10.2 % 増の 1,593 万 9,000 トン、U S D A は同 11.5 % 増の 1,595 万トンと過去最高の生産を予測している。世界のなたね取引に影響大なカナダは、作付面積 (カナダ統計局発表) は前年比 26.4 % 増 294 万 9,000 ha になった。生産量は当初 360 万トン程度予想されていたが、2 年連続で産地が熱波に襲われたため単収が前年比 3.5 % 減の ha 当り 1,087 kg になったことから前年比 21.8 % 増の 320 万 6,000 トンになった。E C なたねの生産は、補助金交付と需要が好調なことに支えられ、作付けは前年比 4.6 % 増の 113 万 ha、単収は同 30.4 % 増 2,950 kg で、生産量は同 35.6 % 増の 338 万 4,000 トンと予測される。中国なたねは過度の経済作物生産の反省等からなたね栽培が引き続き減少の 396 万トンになった。中国のなたねは日本のなたねと同様に在来種で、エルシン酸の含有量が多いため日本、カナダ、ヨーロッパ等では食用に適さず市場性に乏しいという特徴がある。このため中国は日本企業の協力等を得て品種改良に努めている。カナダやデンマーク産のなたねは低エルシン酸、低グルコシノレートであり、フランス産は低エルシン酸と、日本を除く先進国のなたねは殆ど品種改良が進み食用に適するようになっている。

(3) ひまわり (表 10)

83/84 年度の生産はソ連、米国等の主要生産国が減産になったため、前年比 7.8 % 減の 49 万 6,000 トンになった。84/85 年度の生産は、オイルワールドは前年比 9.8 % 増の 1,701 万 2,000 トン、U S D A は同 11.1 % 増の 1,719 万トンと予測し、U S D A は過去最高としている。米国の生産は、U S D A によれば作付けは前年比 18.6 % 増の 147 万 9,000 になったが、早魃に襲われ単収が落ちているほか、収穫時に産地のノース・ダコタやテキサスが悪天候に見舞われているので、生産量は同 16.6 % 増の 166 万 3,000 トンになるとみられている。このうち搾油用種子の作付面積は 13.9 % 増の 136 万 2,000 ha で、残りは食用である。西欧のひまわり栽培は急激に増加しており、特にスペインの増加が著しく、84/85 年度の作付けは前年比 9 % 増の 120 万 ha、生産量は 46.7 % 増の 110 万トンとみられる。E C の生産は大部分がフランスであるが、前年比 29.5 % 増の 127 万 3,000 トンとなった。ソ連の生産は、6 月後半に中南部の穀物・油糧種子生産地帯をソフオヴェイ (Sukhovei : hot & dry winds で小麦の成長期に発生し、穀物や土壌を乾燥させるため農作物に大打撃を与える) が襲ったためこの被害が懸念されたものの、その後は天候に恵まれ、単収が伸び前年比 3.2 % 増の 520 万トンになったとみられている。

(4) 綿実 (表 11)

84/85 年度の生産は前年比 13.5 % 増の 3,001 万 5,000 トンで史上最高と予測されている。綿実生産が伸びるのは、綿花価格が良かったため作付けが増えることや単収が過去 3 カ年の 832 kg から 893 kg に伸びるとみてのことである。米国の生産は、作付が大幅に増え、成育時も天候に恵まれたことから前年比 72.2 % 増の 480 万 5,000 トンと見込まれているが、テキサスからデルタ地帯にかけての綿花生産地が大雨により収穫が遅れているうえ、綿花に雨による被害が出ているので、生

表12 西マレーシアのパーム油生産

(単位:千トン)

月	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985
1	141	168	174	169	187	151	F260
2	143	167	163	191	182	151	F260
3	159	204	191	237	231	206	F290
4	151	193	200	256	216	249	F280
5	146	187	191	255	220	284	F265
6	146	202	218	264	222	268	F305
7	175	233	262	290	253	311	F365
8	169	211	254	374	293	340	F370
9	223	255	288	376	287	382	F420
10	213	208	252	369	274	403	
11	194	193	252	274	240	F350	
12	175	173	200	199	177	F296	
1~12	2033	2397	2645	3253	2782	3,390	4,050
1~6	886	1,121	1,137	1,372	1,258	1,309	1,660

(参考) 東マレーシアの
パーム油生産

1982	1983	1984	1985
12	19	14	
12	14	10	
16	16	17	
21	17	25	
22	18	33	
23	19	32	
23	20	32	
27	23	30	
27	24	29	
28	22	31	
27	24	30	
23	19	26	
261	235	309	350
106	103	131	

(出所) Oil World July 13及びNovember 23, 1984

- (注) 1. 1~12の計は四捨五入の関係で各月の累積値と合わないことがある。
2. F印は予測値である。

産量は見込より下回る可能性が強い。

中国は作付増と天候に恵まれ前年比2.6%増の880万トンと過去最高の生産量が確実視されている。中国の綿実及び綿実油の輸出は最近徐々に増えつつある。ソ連の綿実生産は作付増と良天により前年を上回る490万トンとみられているが、同国政府の収穫奨励にもかかわらず収穫が遅れていることから若干見込より減少するとみて良いであろう。ソ連の綿花生産地ウズベキスタンの綿花受入場の10月25日までの綿花受入数量は、84年424万トン、83年426万トン、82年488万トン、81年495万トン、80年586万トンと年々低下しており、同国の収穫システムに問題があることが推測される。

(5) パーム油(表12)

84/85年度の生産は前年比11.6%増の628万2,000トンと予測されている。パーム油の増産分63万4,000トンは、大豆(油分18%)360万トンに相当する。パーム油生産が回復してきたのはマレーシアやパプア・ニューギニア等のパーム樹が、ウィービルによる過剰生殖や厳しい旱魃(西マレーシア83年1月~4月)の打撃から立ち直ったためである。84/85年度のマレーシアの生産は前年比20.5%増の395万8,000トンとみられている。しかし西マレーシアの4月以降のパーム油単収はウィービル導入以前の79年~81年の平均単収を下回っていると伝えられており、増産は収穫面積の拡大に負うところが大きいとみられるが、85年には単収がかなり改善するとみられている。マレーシアのパー

ム油生産は1985年暦年度中に440万トンの生産量になるとみられている。これは81年以降でみると年平均伸び率は11.7%増ということになる。推定では1985年末にはパーム果房の採取可能なパーム樹の面積は120万5,000haで、同年の平均収穫面積117万4,000ha、ha当たりのパーム油単位は3,748kgと推測されている。インドネシアは84年からウィービルを導入するため84年は増産となるが、その後、花序の雌雄のバランスが崩れ、85年は減産となることから、84/85年度の生産量は前年比3%減の95万トンと予測される。なお、84/85年度のパーム油供給量は10.4%増716万9,000トン、消費量は同9.2%増の617万8,000トンと予測されており、期末在庫量は前年度末より増加するとみられている。

おわりに

アフリカの飢餓をテレビで見たが、栄養不足で授乳の出来ぬ母親、泣き叫ぶ乳飲み児、長い飢えで体が食物を受けつけなくなった子

供、かたや、小麦、コーン、ミルク等の農産物が過剰になった先進国、ミルクに至っては脱脂粉乳にして油粕の替わりに蛋白飼料として用いる。両方とも地球号の乗組員である。

油糧種子から生産される2つの製品、油脂と油粕。油脂は発展途上国中心に消費が堅調に伸び、日米欧を中心とする油粕消費は緩やかな伸びとなると、両者の需給バランスを取るのには極めて困難になる。つき詰めれば、油脂価格が高騰しやすい土壌が醸成されつつあるということであろう。この状況を少しでも改善する法としては、発展途上国の油脂生産＝油糧種子生産を伸ばすことであり、また、パームやなたね等の高含油分の油糧種子の増産を図ること、さらには効率的な加工技術を用いて油脂を生産していくことであろう。しかし、先進国には豊富にある技術や資金等多くのものが途上国には不足しており、今後これらの国々で油糧種子の増産を図るには、基礎的な環境整備が不可欠である。この落差を少しでも埋めれば南北の共通点は多くなり地球号は一層輝きを増すであろう。

海外農業開発 第105号 1984. 11. 15

発行人 社団法人 海外農業開発協会 橋本栄一 編集人 渡辺里子

〒107 東京都港区赤坂8-10-32 アジア会館

TEL (03) 478-3508

定価 200円 年間購読料2000円 送料別

印刷所 日本軽印刷工業㈱ (833) 6971

大きな夢を育てたい。



《日債銀》は、みなさまの有利な財産づくりのお役に立つワリシン・リッシンを発行しています。また、産業からご家庭まで安定した長期資金を供給することによって、明日のゆたかな社会づくりに貢献しています。

高利回りの1年貯蓄

ワリシン

高利回りの5年貯蓄

リッシン

日本債券信用銀行

本 店／東京都千代田区九段北1-13 電話 102 263-1111
支店／札幌・仙台・東京・新宿・渋谷・横浜・金沢
名古屋・京都・大阪・梅田・広島・高松・福岡
ロンドン・ニューヨーク支店／駐在員事務所：ロサンゼルス・ペイサート・フランクフルト



いろいろな国があり、
いろいろな人が住む、
私たちの地球。
しかし豊かな明日への願いは同じ。
日商岩井は貿易を通じて
世界の平和と繁栄に、
貢献したいと願っています。

**We,
The World
Family**

日商岩井のネットワークは
世界160都市を結びます。

NI 日商岩井

海外農業開発 第 105 号

第 3 種郵便物認可 昭和59年11月 15日発行

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS